

私と文学・09 義母のこと

1945年8月9日、ソ連軍が北緯50度の国境を越え日本領土の樺太に侵攻してきた。降伏したのに侵攻は止まない。樺太第二の都市真岡では若い女性電話交換手が集団自決するなど、あちこちで悲劇が起き、およそ40万人いた住民は日常を破壊され、運命を大きく変えられてゆく。翌年12月、ようやく本土への引き揚げが始まる。この中に樺太泊居から岩手原に引き揚げた当時十代の義母がいた。その義母が今年6月、90半ばで逝った。生前、樺太での生活の様子を聴いたことがある。パルプ、鉱業、水産業などで栄え、思いのほか平穏な暮らしぶり。少数だがロシア、朝鮮の人たちとも共存していたという。ソ連軍侵攻の前までは、

義母はよく本を読んでいた。あるとき、一冊の本を勧めたことがある。映画監督としても知られる松山善三の『氷雪の門(潮文庫)』という本だ。北海道の支笏湖畔宿で殺人事件が起きる。事件の糸口

遥かな詩人の姿を見る

晩翠忌記念イベント

「SPレコードで聴く宮沢賢治と音楽」

仙台が生んだ詩人土井晩翠の命日に当たる10月19日、同時代を生きた宮沢賢治をしのびイベントが文学館で行われた。生前に唯一出版された賢治の詩集『春と修羅』の刊行から今年ちょうど百年になるということでも意義深い。SPレコードが奏でる音楽は、木製の

を手繰り寄せてゆくと、ソ連軍侵攻時の、あの真岡にたどりつく……。ミステリー仕立てだが、理不尽な戦争に巻き込まれた樺太住民の語り口は胸に迫ってくるものがある。読み終えた義母はとくに話すこともなく、何か深く感じ入っている様子だった。

晩年、短歌教室に通い詠歌を楽しんでいた義母。30年も前に、こんな歌を詠んでいる。

せめぎ合う中東の地はおぞまじき
ニユース茶の間に迫り来

果てることのない戦争、中東では今も民間人が戦火に翻弄され、多数の犠牲者が出ている。詠まれているのは決して過去の出来事ではない。戦争のむごさを肌身で知る者の思いが感じられ、改めて穏やかな日常がしみめられてくる。

(其田敏美)

「私と文学」の原稿募集

約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

古い手回し蓄音機からかすかなノイズとともに流れ出て、うつむきかげんの賢治が静かに耳を傾けている光景が浮かぶ。

ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ドボルザークなどの楽曲が、レコードだけでなく、クラリネットとキーボードでも演奏された。案内役は「宮沢賢治と音楽」を研究する、ささきたかお氏。静かでユーモアのあるお話だった。(佐)

風と歩こう 25



Photo by Ryuji Sasaki

秋が来た。秋が来た。いつものような秋が来た。とは言えない夏戻りのこの数日。10月になっても暑い日が続いた。けれども青空がない。いつもどよよりの空。晴れたなと思っ

秋が来た。秋が来た。いつものような秋が来た。とは言えない夏戻りのこの数日。10月になっても暑い日が続いた。けれども青空がない。いつもどよよりの空。晴れたなと思っ

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第76号をお届けします。

▽文科相阿部俊子は政治家の原点を「中学の時に児童労働の写真を見た。社会を変えるには政治が必要だと痛感した」と語る。教えた長井さんは「自分で考える力を宮城学院で培い、大切にしていると思う。その気持ち忘れず一人一人の立場に立って施策を遂行してほしい」と教え子の活躍を願った。同感！

▽1995年の映画「幻の光」を観た。原作は宮本輝、監督はこの作品が映画デビューの是枝裕和。ロケ地が奥能登で映画の収益は能登の被災地に寄附されること。地震と大雨に遭う前の独特な陸地と美しい海の情景が、ドラマの進行よりも胸にしみた。(近)

▽コンビニまで歩く。玄関を出ると金木犀が香ってくる。酷暑に負けず咲いたのだと嬉しくなる。交差点に近づくと車に踏み潰された銀杏の匂いがしてくる。こちらも暑さに耐えた成果で、熊やリスには御馳走のはずだ。でも街なかでの食事は遠慮願いたい。などと思いつつ、踏まないように横断歩道を渡った。(和)

▽銀杏並木と言えば北海道大学が有名だが、仙台にも美しい並木がある。県道22号仙台泉線の一部で青葉区広瀬通から上杉山中学校までの2km。道の両側と中央分離帯の銀杏は、春と夏には緑の葉が涼やかに揺れ、秋には金色に輝く。冬は円錐形の裸木が凜と屹立する。四季を通して美しい並木道である。(佐)

文学の杜

仙台文学館
友の会会報

第76号

令和6年11月30日発行

企画展

「文豪、仙台二立チ寄ル。」

それぞれの想い、仙台という街

今回の特別展は、文学を題材にしたゲーム「文豪とアルケミスト」(DMM GAMES)とタイアップした展示だ。チラシのキャラクターは、右上から太宰治・正岡子規・島崎藤村・河東碧梧桐、岩野泡鳴・高浜虚子・宮沢賢治である。とつ

びに見えるキャラクターを一人一人創造し、ゲームの中で生かす様子はとても興味深かった。展示室入口脇に設置してあるノベルズ本にも目をやってほしい。

さて、文豪たちはいつ仙台に立チ寄ったのか。岩野泡鳴が明治24年、教師にな



大正後期から昭和初期には、宮沢賢治が仙台を訪れている。洋書、専門書、その古本、レコードや楽器などが賢治の好奇心をくすぐったことだろう。昭和19年12月、太

宰治が「惜別」執筆のため来仙した。河北新報社を訪ね、魯迅の足跡をたどり、夜は河北新報社の社員と酒席を囲んだ。4日間の滞在だった。

それぞれの作家と仙台、まだまだ知らないことが多い。じっくりと楽しめる展示であった。(和)

仙台文学館友の会(仙台文学館内)
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話 022(271)3020
仙台文学館のホームページ
<https://www.sendai-lit.jp/>

第65回 晩翠わかば賞・あおば賞

晩翠わかば賞・小野寺海翔さん(登米市) 晩翠あおば賞・岡崎千紗さん(仙台市)

仙台が生んだ詩人土井晩翠を顕彰するための第65回晩翠わかば賞あおば賞の贈呈式が、10月20日、仙台文学館で行なわれた。

晩翠わかば賞は、宮城県登米市立上沼小学校6年小野寺海翔さんの「あたりまえ」を生きっていく。晩翠あおば賞は、仙台白百合学園中学校2年岡崎千紗さんの「私」取扱説明書に決まった。応募作品は東北地方の小・中学生から、総数549編。ほかに優秀賞に選ばれたのは以下のとおり。晩翠わかば賞優秀賞は、宮城県登米市・後藤健汰さん、登米市・千葉伊織さん、石巻市・木村未詩さん。晩翠あおば賞優秀賞は、仙台市・浅野光稀さん、仙台市・山崎虎晴さん。

文友一滴

今年5月の友の会総会後に特別展「詩人・石川善助」解説を聞いて、向山の愛宕神社に記念碑があると知り、訪ねてみたいと思った。仙台に住むようになり約半世紀、向山は坂道を車で通り抜けるばかりで愛宕神社に参ったことがなく、一度訪れたいと思っていた。

8月のお盆が過ぎた昼下り、用事で出かけた長町からの帰りに、ふと思いついて愛宕神社に向う車線に入った。熱中症予防のため「日中の外出はできるだけ控えて」と連日気象予報士が呼びかけるさなかで、急勾配を上って着いた神社には人氣がなく閑散としていて、強い日射しが地面を照りつけていた。

その石碑はすぐ見つかった。直下に広瀬川、前方に北側の仙台市が一望できる場所にあった。動物がうずくまっていたような形の石に、四角い枠で囲まれた善助の詩「化石を拾ふ」が刻まれている。詩人の人柄が伝わってくる温かい文字だ。三十一才で不遇の死をとげた善助、短い生涯ながら生来の朗らかさで草野心平や宮沢賢治たちと親交があったという。ここに立った作家や詩人もいたのではと思ひ、場のオーラを感じたりした。重厚な山門をくぐり石段を愛宕大橋の方へ下り始めたが、すぐ挫折。汗だくで引き返すなか見上げた赤い鳥居に、東日本大震災から2年後に竣工したことが白い文字で記されていた。両側の立木は震災時の傾きを直す為かロープが所々に張られ、地面が露出したままの所もある。13年も経ったことを忘れそうになる震災の爪跡に驚いた。

帰り道国道愛宕上杉線はいつも通りの車の流れでその途切れの無さが不思議に感じられた。(近)

特集

「こんなとき、こんな本を読みました」

特集「こんなとき、こんな本を読みました」原稿募集に、多くの会員の皆さまから
お寄せいただき、ありがとうございました。

文化庁の2023年度国語世論調査結果によれば、1ヶ月に1冊も本を読まない人が62%だったという。

本には驚くような力が有ります。知らない世界へのいざない、過去につながる想い、生き方への道しるべ、背中を押す力、謎解き、スリル、伝承、涙、ユーモアも、それぞれの本への思いです。

◆病床日記を読むのが好きだ。例えば高橋たか子の「臨床日記」、正岡子規の「仰臥漫録」など。読み飽きることはない。武田百合子の「富士日記」は病床日記ではないが武田泰淳が亡くなる年の夏の記述からは、元氣そうにみえても静かに命が細くなつていく様子が読みとれ、読む側も自ずと静謐な気持ちになる。というように作家の日記を読むことで私は自身自身の準備をしてきたのだろうか。

(加藤晶子)

◆年に数回はお墓参りする。近くの〇家のお墓の脇に茶色の墓石があり、そこには個人名と参戦経歴らしき記載がある。戦死した方のお墓だそうで、1区画に3基もある所がある。この家では3人も戦死したのだと愕然とする。そしてお盆にお参りのあと帰宅すると取り出すのが「わたしたちのアジア・太平洋戦争」(童心社発行)3冊セット。8月、反戦の思いを込めて目を通し悲惨な現実を確かめる。

(伊藤俊子)

◆要するにどうすればいいか といふ問いは 切角たどった思索の道を 始めに返す 要するにどうでもいいのか 否、否、無限大に否(高村光太郎詩集より「火星が出ている」)生きることにどんな意味があるのか、と自問しながら、他方で酒や麻雀に現を抜かしていた学生時代、この詩句に胸を突かれた。放縦な生活をしぐ立て直すことはできなかったが、自分を見つめるきかけになった。

(菊田郁朗)

◆学生になったのは60年安保の翌年。虚脱状態が学内には蔓延していました。夏期休暇が終わって仙台に戻ったとき何人かが自裁しているのを知りました。そんな時期に古書店で見つけたのは吉本隆明「抒情の論理」。その中の一篇「エリアンの手記と詩」には心を揺さぶられました。自裁を企てた内容だったから。以来吉本を読み続けてきました。岩波文庫版生誕100年詩集も今まさに読んでいます。

(佐藤通雅)

◆通勤電車の中で沢木耕太郎「長距離ランナーの遺書」に夢中になり、危うく乗り越しそうになったことがある。昭和39年の東京五輪マラソン銅メダリスト円谷幸吉にまつわるノンフィクション。ゴールの国立競技場で英国選手に追い抜かれる場面が印象的だったが、メキシコ五輪前に自らの命を絶つ。美しい言葉で綴られた遺書がまっすぐに響き、時間に追われる日々から解放された気分になった。

(其田敏美)

◆平年はあまり年令を気にすることもなくなつたのだが、健康第一を心掛けて生きていく。特に、現役時代は定年の区切りも忘れていた。転籍を言われて第二の職場にめぐまれて11年間。多少責任も軽くなったが、毎日同じペース。その時『80歳の壁』の冊子に会い体力の変化・過ごし方を教えられた。今後の20年「心と体」の持ち方を示された。多いに参考にしている。

(豊島光喜)

◆木彫作家舟越桂著「おもちゃのいいわけ」は、彼が自身の子どものために作ったおもちゃの写真とそれにまつわるエッセイをセットにした本である。おもちゃの家には二階への階段も、外灯も付いている。パネではじく箱型「びんびん」は、よく工夫された楽しいおもちゃで、子に寄せる父親の思いが伝わってくる。遠い日となった我家の子どもたちの幼い頃を思う時、そつと開く本である。

(のの子)

◆日常の些細な事に悩み、考えが堂々めぐりする日、作家佐藤愛子さんの本を思い出した。以前読んで笑ひころげたことがあった。書店で新刊を見つけた。本の名前は、「これだけ言つて死にたい」です。彼女が以前出版された本の中から、わかりやすい箇所を抜粋して、行間もたつぷりあるので、とても読みやすいです。ぜひ読んでみてください。

(春うらら)

◆父親が認知症ではないかと思われたころ、村瀬孝生さんの『おばあちゃん、ほけた』を読んだ。村瀬さんのユーモアあふれる老人たちとのコミュニケーションはとても楽しく、認知症になることは悲しいことではない、周りの受け取り方によっていかようにも明るいもの出来るのだと学んだ。認知症が進んでもなんでもいい、穏やかな気持ちで暮らしてもらえれば、娘としては満足です。

(星佐都子)

◆再就職からも退職し、のんびりと過すのにも飽きてきた頃、新聞の書評で倉本聰の『破れ星、燃えた』を知り、なんとなく興味を持って取り寄せました。

(山下一)

読み始めると引き込まれ、ずっと順風満帆の人だと思っていた氏が、実は壮絶な事件や素晴らしい出会いを経て、私が知る現在に至ったことを知りました。今更人生の舵を切ることはできないですが、勇気と感動、笑いを貰いました。

(山下一)

◆1945年6月宮城県桃生郡飯野川、4月に父爆死、5月に疎開、家焼失。茫然自失の小生に、祖父が屋根裏の蔵書を全部上げると云った。専門書ばかり。やつと見つけたのが、ユゴーの『レミゼラブル』黒岩派香訳「噫ノ無情」を読んでいた小生にとって、事実は小説より奇なり的人生だった。卒寿を過ぎて、孫娘を「コゼット」その兄を「マリユス」にたとえる今日この頃、むべなるかな。(横山隆一)

◆私は今病みあがりである。ずっと寝込んでいたのでしばらく他人とは口をきいていない。でももう治りつつあるのだから外の世界に出て行かなくちゃ。ひとと話をしつて働いて行動しなくちゃ。さて、そのために武装する。村上春樹の本を読んで、あの世界で私を守つて。というわけで、現実についていけない時に、私は村上春樹の本を読みます。(一)

(一)

◆子育て真っ最中のころ、エプロンのポケットには文庫本が入っていた。子供たちへの命令口調、叱る声。いらつく自分がイヤになった。そんな時、トイレに逃げ込んで本を読んだ。池波正太郎の鬼平や丸谷才一のエッセー、一ページ読めば一息つけた。深呼吸吸し、口角をあげてトイレから出る。次の事件までは穏やかでいられた。その友は、今もお守りのように本棚の下段で私を見守っている。(K)

◆テレビドラマで物語の原作者が表示される。ドラマの原作はどのようなものか本を読みたくなり読んでみるのがよくある。NHK朝ドラの「純情キラリ」は津島佑子原作で「火の山」山猿記とあった。上巻下巻とあり、とてもむずかしく、山梨県の鉾山のはなしあり、戦前、戦中、戦後の時代を背景にさまざまな世相がえがかれている長編小説。とても片手間には読めない。もう一度じっくり読みたい。(K・T)

第64回読書会

避暑地が語る人生

マンスフィールド「湾の一日」

バンガローに滞在している家族の一日が詳細に描かれる。孫達の愛らしさ。死への畏れや祖母の悲しみ。男達が出掛けた後の女達の開放感。労働の不条理。異なる生き方への憧れなど。緻密な描写が情景を際立たせ、読み手の心に分け入って、さりげなく人生を考えさせる。

*若い作者の表現に惹かれた。大人の社会が青春風にも描かれている。

*子ども達の遊びの場面が温かい。女性の目線で書かれることに興味があった。作品の結びの文章が良かった。

*登場人物が多い上に、とりとめのない場面のつながりで分かりにくかった。

*作者の繊細な感性が、緻密な観察と描写になつている。洋画を見るようだ。



*読み込んだはずなのに、思い込みで人物を全く勘違いしていたことに気付かされた。

10月9日 新会員を迎えて5名出席。(佐)

次回読書会は12月11日(水) 14時
ダフネ・デュ・モーリア「動機」(創元社
推理文庫「鳥」所収)

※友の会会員は自由に参加できます。
申込みは友の会事務局まで。